



営農情報

第83号 平成31年4月26日

「あまおう」5月の管理

南筑後普及指導センター
福岡大城農業協同組合

10a 当たり収量 5t 以上を目指しましょう

1 生産販売状況

3番果房の収穫は、3月下旬から4月上旬にかけて出荷ピークとなりました。4番果房においては、昨年と比較して出蕾の揃いは良く、早いところでは収穫が始まっています。(図1)

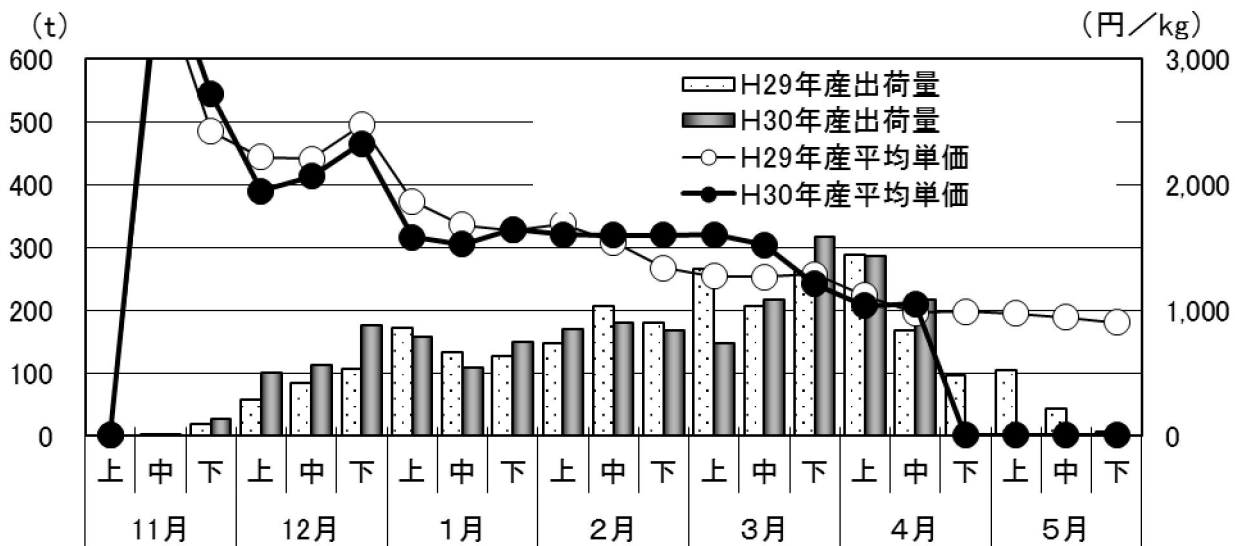


図1 J A福岡大城のイチゴ総出荷量と平均単価の推移

2 親株の状況

3月中旬以降、日照時間が十分に確保されたことで親株の生育は良く、ランナーの発生も概ね順調です。しかし、一部のほ場で乾燥や手入れの遅れによりランナーの発生が遅れているほ場もみられます。今後の気温は平年より高い見込みで、降水量はやや多い予報となっています。高温多雨の気象条件下では炭そ病の感染リスクが高まります。また、アブラムシ、ハダニ類、アザミウマ類(スリップス)の発生が確認されています。定期的な防除を行いましょう。

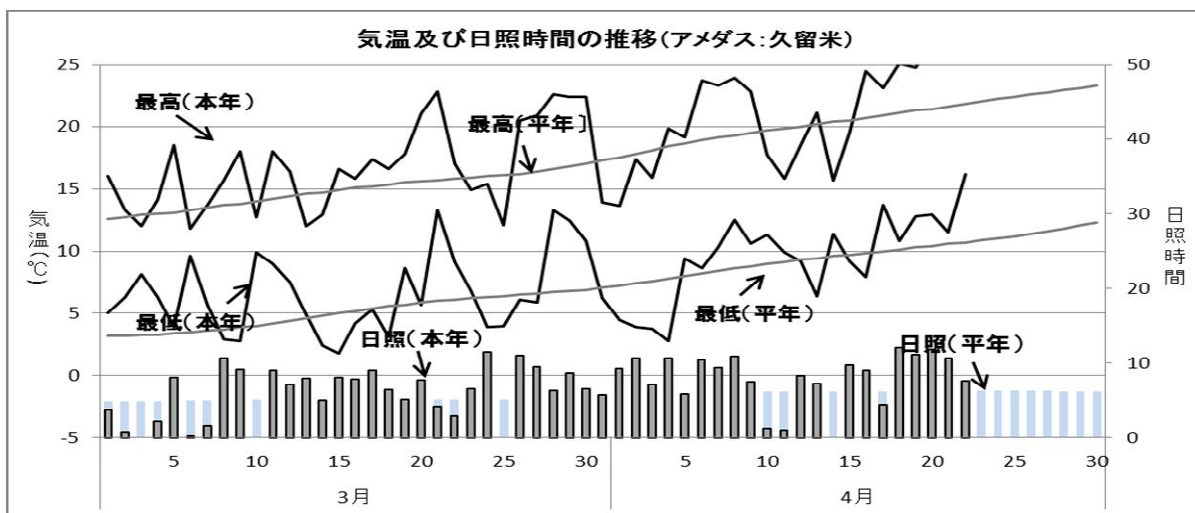


図2 気温及び日照時間の推移 (アメダス久留米より)

3 今後の管理

(1) 本ほ管理

傷み果の発生を防ぎ、更なる収量アップを図りましょう。

<軟果・傷み果対策>

- ・ 収穫作業は高温時を避け、着色基準を遵守する。収穫日の間隔は短くする。
- ・ サイド・谷・妻面を開放し、換気を充分に行う。
- ・ 収穫した果実は、収穫箱内での積み重ねを避け、直ちに低温の場所に移す。
- ・ 収穫後の少量多回数かん水に努める。
(土壌水分の目安は、pFメーターで1.7~1.8、軟果が多い場合は2.0程度)

(2) 親株管理

親株の乾燥や肥料切れ並びに不必要な下葉及び花蕾の除去の遅れは、生育の遅れやランナー発生の遅れに繋がるので、早めの管理を行う。

<ランナー発生促進>

- ・ こまめなかん水と施肥を行う。
特に、プランターは乾燥しやすいので、株元にかん水チューブを設置し、確実に株元にかかるようにこまめにかん水する。また、5月上旬までにIB化成S1号を、1株当たり5~10粒施用する。

<下葉かきと花蕾除去>

- ・ 不必要な下葉及び果梗(花蕾)は、早めに除去する。
ランナーの発生を促進するために、親株の負担を軽くする。

<ランナー配置>

- ・ 風雨によってランナーが1か所にかたまってしまうと子株が徒長するため、ランナーを均等に配置する。また、通路側に出ているランナーを畝内に配置する。

<病虫害対策>

- ・ 「炭そ病」は予防散布の徹底が重要
1枚展葉する毎(7~10日毎を目安)に定期的な予防散布を行う。
「炭そ病」は降雨などで感染拡大するため、降雨前後の防除を徹底する。
30年度産で「炭そ病」が発生したほ場では、親株も感染している恐れがあるので、「うどんこ病」と併せて定期的な予防防除を行う。
- ・ アブラムシ・ハダニ類の発生が見られる。また、今後うどんこ病やアザミウマ類(スリップス)・カキノヒメヨコバイ等の発生が懸念されるため、適期防除を行う。
- ・ 雨よけ栽培を行う場合は、風通しを良くして多湿にしないよう注意する。

(3) 育苗準備

<育苗床の環境>

- ・ 育苗床は、風通しが良く浸冠水のない排水良好な場所を選定し、万全な排水対策を行う。
- ・ 苗の徒長防止や炭そ病予防のため、ポットの中心間隔を18cm程度確保できるように、育苗床は十分な広さを確保する。

- ・ うねは、中央部をやや高くし（かまぼこ状）、水がうね上に溜まらないようにする。
- ・ 床面には古ビニルを敷き、さらに、ポットシートやマリックスシート等を上に敷く。

<育苗培土>

- ・ 培養土は、排水性が良く、土がしまりにくいものを選ぶ。
- ・ 培養土量の目安は、8,000 鉢当たり 3.5 寸ポットで4 m³、3 寸ポットで2.5 m³とする。
- ・ 「炭そ病」が発病した場合に、発病株及び周辺株を除去出来るように、**苗本数は3割程多めに準備する。**

<鉢上げ>

【さしポット】

- ・ マルチフィルム上に稲わら被覆を行った後（写真1）、かん水施設を設置し、採苗1週間前からかん水して子苗の発根を促進する。
- ・ 乾燥状態では、親株の生育やランナーの発生が抑制されるため、十分なかん水でランナーの発生を促す。
- ・ 作型に応じて目標とする鉢上げ時期（6月上中旬）までに作業できるように、育苗ポットの準備を計画的に行う。（表1）



写真1 全面マルチ+稲わら

表1 《目標鉢上げ時期》

8月処理開始の株冷	⇒	6月10日まで
8月処理開始の夜冷 9月処理開始の株冷	⇒	6月15日まで
9月処理開始の夜冷 普通ポット	⇒	6月20日まで

【すけポット】（写真2）

- ・ 根がこぶ状になった苗を鉢に受け、ランナークリップ等で止める。
- ・ 大き過ぎる太郎苗は鉢上げせず、全葉を除去する。
- ・ ランナーが、極端に細い子苗は使用しない。
- ・ 鉢土が乾燥すると根の伸張が悪くなるため、乾燥させないようにかん水を行う。
- ・ 鉢受け作業前後の炭そ病防除を徹底する。
- ・ 鉢受けは、5月末までに終了する目標で行う。
- ・ 鉢受けが終わったら、苗の生育促進のためランナーの先端をピンチし、苗の徒長防止と病害虫予防のため、親株の全葉摘除を行う。



写真2 すけポット

※充実した苗を作るには、採苗時期が遅れないようにする。

そのためには、計画的に早めの作業を行うことが重要!!

特集 「イチゴの萎黄病対策について」

イチゴの萎黄病の発生が増加傾向にあります。萎黄病は土壌伝染性の病害であり、発生ほ場では次作の発生リスクが高くなります。親株、育苗の管理、土壌消毒による本田管理による防除の徹底を行いましょう。

1 生態

病原菌は孢子によって土壌伝染し、発芽して根から侵入し、導管部を侵す。また、罹病した親株からはランナーの導管部を伝って苗に伝染する。

感染株は次第に生育不良になり、葉は小葉の1～2片が小型化やねじれ等奇形化する。(写真3) 葉は黄変、矮化し、激しいときは枯死する。(写真4) また、このような株はクラウンを切断すると導管部の褐変が見られる。(写真5)

菌の発育適温は28℃で、25～30℃で発病が多く、本圃では2月以降に増加する。

2 病徴

写真3



小葉が奇形化する

写真4



症状がひどいと枯死する

写真5



導管部が褐変する

3 防除法

(1) 親株管理

- ・土壌伝染するため、親株は無病圃場に罹病していない無病苗を植え付ける。
- ・前年度に発生した場合は、親株を更新する。
- ・高設採苗で発生した場合は、資材(プランター、小型ポット)をケミクロンG等で消毒する。また、ポリポットの場合はポットを更新する。さらに、プランターで使用する培土も更新する。
- ・発病株及びその株から発生したランナーは除去、処分する。(ランナー伝染する)

(2) 育苗管理

- ・発病苗は除去、処分する。

(3) 本田管理

- ・太陽熱消毒に加え、クロルピクリン等による土壌消毒を行う。
- ・トラクターや管理機等、土壌が移動する農機具は、水洗いを行い土を流す。
- ・発病株は除去、処分する。

～「慣れ」と「油断」が事故を招きます～